

二〇一三年四月七日

二〇一三年四月四日

終点と肩叩かるる目借時  
花屑の張りつく雨の石畳

智恵子  
かほんこ

頬杖の崩れ落ちたり春眠し  
花冷すこんなところに自刃の碑  
火床まで来て振り向けば古都霞む

豊実

一〇三年四月三日

花時の堤に現れし料金所  
花は葉に卒寿の命全うす  
女子会の〆のケーキは春苺

二〇一三年四月二日

下り来る子らの挨拶春山路

智惠子

湯上りのうなじを撫づる落花かな

一駅を歩くと決めて花惜しむ

明日香

湧き出づるごとくに盛る雪柳

満ち潮に押し戻さるる花筏

卷之二

二〇二三年四月一日

花の雲目路に山上レストラン

素  
秀

悪しきことみな嘘であれ万愚節

風光る両手離しに一輪車

七八

蝦夷の旅もてなしならめ馬糞風

○三三四年四月五日

卷二

春空に大十字切る飛行雲

川底の景が伊走右谷

せいじ

毎日句会みのる選

静かなる琵琶湖疎水に桜散る

毎日句会みのる選・二〇一三年四月九日